

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第18号

2012年 5月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

「被造物のひとつである人間」

東京教区 司祭 マリア・グレイス 笹森田鶴

2011年3月11日以降、巨大地震と大津波という自然災害、そしてその後の東京電力福島原子力発電所の重大事故後、そして一年が経過した今も、東北をはじめとする被災した地域の方々の生活は、考えられないような大きな変化を余儀なくされています。

一年が経過した後も、津波に押し流された生活のすべてが未だがりきとなって残り、誰も住めなくなった家や建物の外側だけが、そして大きな船が、街の中にむき出しになって残存している地域に住む方々。自宅に住んでいるにしても、仮設住宅にしても、それぞれの生活の課題があまりにも複合的に起こっているが故に、抱えきれない苦しみをもって生きている方々。また、目に見えない放射能被曝の不安におびえながら、何を信じるべきか、何を選ぶべきかという価値観の違いのぶつかり合いの中で、疲れ果てている方々。残るが故に家族や地域の中で分断される方々。子どもたちのためにふるさとを離れること

を決断したが故にふるさとと分断され、さらに避難先の地域に馴染めずに生活苦を抱えている方々。これまでの生活が瞬時に根底から覆されたまま、広範囲であまりに複雑な被害のただ中に置かれているという状況が、未だ続いています。そして、すでにあった地域格差や個人間の経済格差が、この大災害と大事故の後、さらに如実に表出し、その苦しみを増していると言われていています。

東北は貧しかったのです。そして明らかに日本社会の中で周縁にある地域であったのです。あれだけの広さと自然環境、また文化の多様性を兼ね備えていた地域が、「東北」という言葉ひとつに一括りにまとめられる程に、日本の中で小さい存在であったのです。そのことがこの度の出来事により、思い知らされます。これらの方々の置かれている現実に少しでも触れる時、何を語ろうとも言葉が風で吹き飛ばされていく思いがします。それでも人びとは、かつてからそうであったよう

に、今も、そこに住み続けています。

これまでキリスト教界は、多くの人びとの声を聞いてきたはずでした。それらは、被造物同士の共存の重要性、温暖化や環境破壊への警告、また自然や人間の生活を圧倒的に破壊する戦争への否、ライフスタイルの変革への勧めなど、多岐に亘る現実社会からの悲鳴のような声を聞いてきたはずでした。その結果が、ACC-8 で加えられた「宣教の5指標」の一指標、「被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにすため努力すること」につながっていました。「完全さ」と訳されている言葉は、以前は「保全」と訳されていた、**Integrity** という言葉です。統一体を構成する部分がすべて十全に組み合わせられ、異なる機能が全体として統一され、調和のある完全なものとして統合されることを意味する、重要な示唆を含む言葉です。

しかし、神と人との契約や交わりについての神学的関心程、被造物の **Integrity** に心を向けてこなかったように思えます。人間が被造物のひとつとして自然環境の中でしか生きられない存在である事について、責任的に応答してきただろうかと思われかえさせられています。人間同士の尊厳を認め合うことすらままならない現実の中、人間以外の被造物へ関心に向け、神が造られた宇宙全体の調和と統合を認め、欠けがあるとところの回復に力と知恵を注ぐことは二次的なことのように捉えていたのではないのでしょうか。今起こっている地域格差や経済格差も、自然との調和

やそこから与えられる恵みの分かち合いへの関心の低さが故の結果であるように思います。それがために、東日本大震災の後に起こっている様々な出来事が、さらに被災された方々へ重荷を負わせることとなっているとするならば、もはや誰一人この現実に無関係な者はいないと言えます。

本来日本は、豊かな自然の中でその文化や感性、社会、精神を形成してきたはずでした。それは日本の地における宣教活動の重要な賜物として、用いるべき宝だったはずでした。その宝を十分に今こそ思い出しながら、わたしたちは自然環境の中で生きる被造物としての人間の有り様を神学的に再構築し、実践していく課題を神様から与えられています。

神は、初めに天と地をお造りになりました。人間を最初にお造りになったのではなく、天と地の創造のみ業の後で、人間をそこに置いてくださいました。そして自然を支配するように、つまり与えられた神からの恵みに、人間が責任的に応答するようにと召してくださいました。声を聞き漏らすことが再びないように、新たな道を模索していくことが今求められています。

神よ、天の上に高くいまし

栄光を全地に輝かせてください。

あなたの愛する人びとが助け出されるように
右の御手でお救いください。

それを我らへの答えとしてください。

(詩編 108:6,7)



家出をした妻からのメッセージ

中部教区 司祭 イグナシオ 丁 胤植

私の妻は高校時代、聖職について考えていたそうです。当時は「女性の司祭助手」の道はまだ開かれておらず、教会で働いていた私と結婚して、代わりに自分の夢が叶ったと思っていたのか教会生活にとっても熱心でした。いわゆる、牧師夫人のイメージだったと言うか、私も妻のそのような姿が嫌ではありませんでした。

ところが、結婚後2年目になる年、うちの家庭には葛藤が生じました。無意識の中、私は妻に愛する人という点より牧師夫人の姿を強く求めていたようです。それが原因で、全てを整理しなければならない状況に至ったこともあります。幸いにその問題は治まり、夫婦牧会体系に入りました。日本宣教を志願した時も妻は理解してくれて無事に日本に着くことが出来ました。

妻は欲張りです。読んでもないのに気に入りの本が見つかるのとにかく買っておきます（フェミニズム関連書籍含）。欲張りという言葉よりは学びたいことやしたいことが多い人というか、日本に来て4年程経った時、自分はカウンセリングの勉強をするため大学で心理学を学びたいと言い出し始めました。ただその瞬間の思いつきの話だと思いましたが、時間が経てば経つほど頻度が多くなり、話し合いの中、「結局あなたがしたいことはカウンセリングなのか聖職の働きなのか、最終目的が聖職なら神学校が良いので

は」と助言しました。つまり今も私が妻に自信を持って言える部分は妻の聖職の発端は心強い夫の支えのお陰だったと…。

二人の別居は既に5年、妻の神学校生活まで入れれば8年になります。妻はそのように8年前家出をして私も一人暮らしに慣れていきました。妻が神学校に入ってから私たち夫婦は再び葛藤を経験しました。妻はフェミニスト神学にもっと深い関心を持つようになり、私たち夫婦の間にはフェミニストの問題のため、いつも言い争いの声が高くなり、私はこれ以上そんな種の内容を会話に持ち込まないようにと断言しました。妻は私に「女性の聖職」について賛成なのか反対なのかと聞きました。私は「反対はしない」と言い、この答えに妻は賛成でも反対でもないということは反対だと言いました。極めて当然の論理ではありますが、私は口では賛成と言いながら無意識の中で女性の聖職について反対していたことに気づかされ、妻の聖職の道を応援するようになったのはその時からだったと言えます。

しかし、それは単純な問題ではありませんでした。妻が神学校に行くことと決めた時、私は中部教区に居る限り（中部地域は物理的に広い点で）私たち夫婦と一緒に暮らすということは難しいと思っていました。当然、妻もそう考えていると思いました。ところがいつからか妻はどんどん弱音を吐くようになって、

私はその言葉にもっと厳しく反応しました。そのような覚悟も持たず聖職志願をしたのかと…。

その他にも妻は牧会地であった大変な経験を私に話してくれたりしましたが、私はそのたび妻の話を温かく受け止めるどころか「あなたが選んだ道でしょう」と、いつも厳しい言葉ばかりでした。

私たち夫婦の葛藤は神学問題、教会問題、牧会問題によるのが8割以上です。そういう意味から言えば勿論今も葛藤は進行形であります…。

羊飼いは、お互いの羊の群れが混ざると大変なことになるため、お互いに羊の番をして

いる間には一緒に居られないそうです。それで遠くにいる人同志、お互いの無事安否を確認するためお互いに笛を吹いたりします。私たち夫婦の一つ一つの出来事はお互いに離れている二人の羊飼いがお互いへ送る草笛の音色なのかも知れません。

最近、妻からメールでイメージファイルが1枚送られてきました。「今日、丁 胤植、あなたが恋しいです」という意味の韓国語文字で書かれたメッセージでした。

家出をした妻からの愛の心ですね。

■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑦ ■ ■ ■ ■ ■

～ チャーチ・ハラメント ～

中部教区 司祭 アンブロージア 後藤香織

わたしは定期的に「性同一性障害」の治療で、遠方の病院まで通っています。性同一性障害の治療、カウンセリングは「ガイドライン」という、日本精神神経学会の作成する指針に従って行われます。以前ある信徒さんから、「あなたの性同一性障害であるという診断が間違っているのではないか、もっとちゃんとした医者にかかるべきだ」と言われたことがあります。わたしの主治医も、セカンド・オピニオンの先生も、ガイドラインの作成委員の方々です。ちゃんとしたお医者さまで、わたしはもちろん信頼しています。

それで、この遠方までの通院は、長くても15分程度のカウンセリングで終わるのですが、わたしとは直接関係のない話もその中に含まれます。その話というのが、大変残念なことに、他の性同一性障害の患者さんに関係して、意見を述べに来るキリスト教の牧師たちのことなのです。

「診断を取り消せ」とか「普通の状態に治療しろ」とか、半ば殴り込みのような勢いでやって来る人たちは、どういう訳か、みんながみんなクリスチャンだというのです。お坊さんがやって来たり、他の宗教の人がやって来ることは無く、キリスト教の人だけがやって来る。どう考えてもキリスト教に問題があるように思えてなりません。

実際に、某新宗教の方々の、セクシュアル・マイノリティに対する理解と対応は、とても定評があるのですが、そのしっかりした対応に比べると、あまりにも一方的に自分の「正義」を振りかざす、クリスチャンたちの暴力的な対応は、お粗末すぎて話しを聞いていて本当に悲しくなり

ます。

この原稿を書いている間にも、自分らしく生きる決断をしたことを、牧師に告白した方から、そんなことをすれば「地獄に落ちることになる」と脅しを受けたという相談が舞い込みました。

「神の裁きがある」とか「同性愛は聖書で禁じている」とか、セクシュアル・マイノリティに対して行われるこれらのクリスチャンの言動は、神さまの権威を笠に着た「チャーチ・ハラスメント」とでも呼ばれ得る、教会のハラスメントの特徴を如実に示した、暴力以外の何ものでもありません。神さまや信仰、そして聖書の権威を笠に着て、自分の意見を「正義」として振りかざして行われる教会特有のこのハラスメントは、残念ながら教会の様々な場面で見聞きすることが出来ます。なかでもセクシュアル・マイノリティは、「悪」である、という教会の中にある漠然とした思い込みが、セクシュアル・マイノリティへの言動を、それが自分の思いであるにも関わらず、神さまの権威を笠に着て「正義」を振りかざす「チャーチ・ハラスメント」となって現れやすいのでしょうか。そして、この言葉の暴力は、発言する人自身は、「正義」と認識しているために、顧みられることは無く、さらには周囲から容認、称賛される場合すらあるのです。

わたしたち教会は、相手の状況や事情を考慮せず、自らの「正義」を振りかざして、人々を攻撃するまえに、まずそのような自らの暴力性、ハラスメントをなんとも感じない姿勢を真摯に顧みることが必要なのではないのでしょうか。わたしがカウンセリングの時に、「クリスチャンの人たちは、神さまを信じている人たちなんだよね？」という疑問を、お医者さまから聞かなくて良くなることを祈っています。



ニューヨーク国連女性の地位委員会に参加して ～農村女性のエンパワーメント及び 貧困と飢餓の撲滅、開発、現在の課題におけるその役割～

北関東教区 田中 糸み

今回、ニューヨークへ送る代表に私を選んで下さり、初めは大いにとまどいましたが、たくさんの方に支えていただき、励ましていただき良い経験が出来ました。今後どう生かすかが課題ですが、まずは報告をさせていただきます。

福島聖ステパノ教会信徒の西間木美恵子さんと私志木聖母教会信徒の田中 糸み (NCC 女性委員会委員長) は、2012年2月27日(月)～3月9日(金) ニューヨーク国連女性の地位

委員会[United Nations Commission on the Status of Women 56] と並行して行われる “NGO/CSW 56 FORUM 2012” に参加しました。テーマは “The empowerment of rural women and their role in poverty and hunger eradication; development and current challenges.” 「農村女性のエンパワーメント及び貧困と飢餓の撲滅、開発、現在の課題におけるその役割」(内閣府資料による)」です。



「サイドイベントにて」 「国連チャーチセンターでの礼拝で」

西間木さんは、東京電力福島第一原子力発電所から北西に60kmの福島市に住んで居られ、原発事故によって福島が今どういう状況にあるかをレポートされました。私は、化石燃料と電気を使い放題の現状に小さな抵抗を試みている（薪ストーブ・太陽光発電）立場から、またNCC女性委員会として、脱原発を呼びかけている立場からレポートを準備しました。

参加が決定し、登録を済ますと、追いつ追いつにUN OFFICEからメールが届き始めました。長い英文を訥々と読むのですが、急ぎの用事を先にしたりすると宿題に追いつけなくなってしまいます。“まだ返事がない”と言われてあわてたことも…。そうして送られてきた資料の中に、400ページに及ぶ国連の各国代表部員の名簿もありました。意味が分からなかったのですが、通訳を買って出て下さったRachel Clarkさんは“貴重なもの”とよろこんでくださいました。

1月半ばに、内閣府主催の説明会があり、参加しました。堂本暁子さんのお話などから、

- ・政策決定に「女性の視点」という文言を挿入するのが大変だったこと。

- ・第4回世界女性会議（1995年北京で開催）での決定からいま17年が経過したが、

経済の停滞等により女性の地位は悪化している。第5回の女性会議の期日は3年後に迫っているが、北京での合意を前進させるような会合が準備できるかどうか危ぶまれている。

- ・毎年参加するNGOが、サイドイベントを持つ。

と言うようなことが解りました。

サイドイベントのイメージは今ひとつ解らずじまいでした。

コンサルテーション・デイは、華やかなオープニングセレモニーでしたが、後半のパネルディスカッションに、大阪YWCA所属で、有機農業に従事されている雀部真理さんが参加され、放射能汚染に関する懸念を表明されました。また、アジア学院副校長（メソジスト派）の荒川朋子さんが、サイドイベントで放射能汚染の問題を強く訴えられました。放射能汚染に関する報告に対して、殊に欧米の関係者の反応は大きかった様に感じました。

初日に変革すべきジャンルとして“Conversation Circle”がもたれ、平和と安全、高齢化、民族問題・移住労働、健康、持続可能な開発、気候変動など入門的なイベントがあり、それに関連する個別のイベントのチラシやレジュメがたくさん用意されていました。最初の一週間は同時に6～7カ所、約2時間単位のさまざまなイベントが開かれ、私たちはハンドブックと首っ引きでプログラムを組んで、世界の女性達のとり組みを学びました。

多くの場合それらの「とり組み」は、政府や教会など、推進する主体が発表しているので、輝かしい成果があがっている、というものです。しかし、イラクの発表の時に”「劣化

ウラン弾による放射能汚染・子供の被爆」に関して心配な報道に接しているが、。”と質問すると、フロアーに緊張が走り、司会者は堰を切ったように放射能の話を始めました。終了後にはアメリカの医療関係者に囲まれて意見交換をしました。放射能の問題は高度に政治的な問題で、アジア・太平洋地域でのコーカスにも、脱原発という提案は受け入れられませんでした。国連にも政治の黒い影を感じました。

現地に通訳として参加して下さった Rachel Clark さんの奨めもあってロビイングをしようと言うことになりました。聖公会管区事務所の Rachel Chardon さんをお願いして、国連大使宛の紹介状を作っていただき、日本が原発を輸出しようとしている国の国連大使に、「日本から原発を買わないで下さい」とお願いすることです。Rachel Clark さんが、Secretary とメールで打ち合わせし、UN 本部のロビーで会見します。こちらはなるべくたくさん賛同者を集めます。3カ国の代表者と会見しましたが、YWCA の雀部さんと江尻美穂子さん、韓国の Petra イー司祭がいつも同行して下さい、最初のヨルダンの時にはスコットランドの Elaine Cameron さん、インドの時には Peace Boat の Emilie McGlone さんが二人のインターンさんと来て下さいました。ヨルダンの1

等書記官氏は「大量の水を必要とする原発は自国の条件にそぐわないので、導入は考えられない。自国の全国紙に毎週コラムを書いている。この会見に関して書く。」と言って下さいました。ベトナムの若い女性の書記官は「よく解った。自分には決定権が無いが、この会見の趣旨を伝える。」と言って下さいました。堂々たる体躯のシーク教徒のインド国連大使氏は「原発の導入は国会で可決された。実施するのは民間企業なので、国は規制できない。」と、懇懇丁寧に送り出されました。

現地ではインターンとして、たくさんの若者がアシスタントとしてきびきびと働いていました。素晴らしい経験だと思います。2013年秋に釜山でWCCの大会があり、NCCでスチュワードを募集しています。焦点の定まらないホームステイなどより、このような場に若者を送り出してあげたいものだと強く思いました。

貴重な体験をする機会を与えていただいたことに、心より感謝いたします。CSWの代表として、またはインターンとして、次の世代を是非送り出したいと切に願っています。



「聖公会代表团、各管区からの派遣者一同」



教会女性のためのリトリート

～あなたのギフト～

探すー見つけるー楽しむー使う



正義と平和委員会ジェンダープロジェクト担当
大岡 左代子

昨年の11月4日(金)～5日(土)「秋の週末、京都に集いませんか?あなたに与えられているギフトを数倍楽しむために!」という呼びかけに、7教区から24名の女性たちが集い教会女性のためのリトリートが開かれました。大変遅い報告になりましたが、その様子を少しでもお伝えできれば…と思います。

リトリートのリーダーは、今年の3月まで聖公会神学院でスピリチュアル・ディレクターとしてお働きになっていた景山恭子さん。かねてから女性デスクとジェンダープロジェクトとで、教会に集う女性たちのエンパワメントのためのリトリートを企画したいと考えていたのですが、今回はその思いを景山恭子さんが受けとめて下さり、はるばるニューヨークから来てくださっての実現となりました。

午後3時半からのセッションは「神さまの息」を感じることから始まりました。人は、神さまの息を吹きかけられることによって造られた、人が誕生した時にあげる産声はこの世での最初の「息」、人がこの世での生を終える時にも大きな「息」をして終える。これらの「息」はすべて吐き出す「息」。私たちはすべてを「吐き出す」ことによって新たな息を吸い込む・・・そんなリードの中で、私たちが神さまの息によってこの世に生きるものとされたことから、今、生きていることを呼吸によって感じる時を過ごしました。そして英語で「捨てよう、捨てよう、すべてを捨てよう、神がすべて」と歌いながらエクササイズ。「来たれ、来たれ、すべてのものは来たれ、神がすべて」と捨てた後は、来るもの拒まずという気持ちを歌にこめてエクササイズ。捨ててしまった後に「来たれ、来たれ」と歌う気持ちは、なんだか捨てる前よりも強くなっていると感じるのはとても不思議な体験でした。

それから私たちは「遊び」の世界へと誘いざなわれます。子どもたち



にとって遊びはまさに生きる力であり、生きることそのもの。その中では、主体的に事物に働きかけ、さまざまに工夫したり試したり、創意工夫をしながら多くのことを体験的に学んでいきます。そこでは、自由になること、心を自由にすることが大切。旧約の神のヤハウエが「ハーヤー」という動詞から出ていることは明確ですが、この「ハーヤー」という動詞は元々、活動的であるという意味をもつもので、神さまはたえず動き、活動しておられる、つまり遊んでおられるのです。そんな神さまをイメージしながら、子どもになって自分の心を自由に遊ばせてみましょう・・・自分にとっての「遊び」とは何か・・・心をしずめて黙想しました。

そしていよいよメインテーマの「あなたのギフト」へ。ヨハネによる福音書4：7-15のイエスとサマリヤの女との会話から「ギフト」について思いを深めました。10節でイエスが言われたことば「もしあなたが、神の賜物を知っており・・・」の「賜物」を「ギフト」と読み替えて何度も聖書を読み返します。一人で、何人かで・・・。「もし、あなたが神のギフトを知っており、また『水を飲ませてください』と言ったのが誰であるか知っていたならば、あなたの方からその方に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」何度も読むうちに「ギフト」という言葉が、自分の中に入りこみ、「ギフト」とは何か?という気持ちがわいてきます。『私たちは「賜物」と聞く時には、それは何かの「才能」であったり「できること」「責任をとるなうこと」「応答」などと思いがちですが、果たしてそうでしょうか?』という景山さんの問いかけに、各自が「私のギフト」について思い巡らし、その思いを分かち合いました。そして、何度も何度もこの箇所を声にだして読み向き合う時、自分が今ここに存在していることそのものが「ギフトである」という喜びを見出すことができたのは私だけではなかったのではないかと、という気がします。最後のセッションでは、一人ひとりが一本ずつろうそくを灯しながら「私は世の光です」と言い、その後その方の名前を呼び、全員で祈りました。「～さん、あなたが慈しみと愛で満たされますように。すべての苦難から解放されますように。癒しがありますように。主の平和がありますように。」と。自分だけのためにみんなが祈ってくれている・・・ちょっと気恥ずかしい気持ちもありながら、その祈りが大きな力を与えてくれることを身体で感じる瞬間でした。全員のろうそくが灯り、全員が祈られた時、本当に聖霊に満たされたとても心地のよい空気が会場全体を包んでいた気がします。そして、もっともっと黙想をしたい、そんな気持ちを心にとどめながらそれぞれに自分の場所へと帰ってきました。

初めての企画でしたが、卒業間近の女性の神学生にぜひ参加してほしいという思いから、今回は、ウイリアムス神学館のリセス（休み）に合わせた時期の京都での開催となりましたが、これからもこのような黙想会を各地で開きたいと願っております。この集まりのために心をこめて準備下さりニューヨークから来てくださった景山恭子さん、そして参加してくださったみなさまに心から感謝したいと思います。（管区事務所だより1月号より転載）

□ 女性デスクより ～ACC15に向けて □

IAWN (国際聖公会女性ネットワーク) は、今年10月にニュージーランドで行われる ACC15 (ACC: Anglican Consultative Council 聖公会中央協議会) に、女性に関する課題についてその進捗状況を報告することにしており、女性デスクでもそのレポートの準備をしているところです。具体的には2006年のACC13で挙げられた次のような課題です。

「女性と少女に対するあらゆる形態の暴力の根絶」「ヘルス・ケア」「安全な水」「雇用機会へのアクセスを確保することによる極度の貧困の根絶」「アングリカン・コミュニオンによるジェンダー平等の推進」「HIV/AIDS」「マラリア、結核との戦い」「ジェンダー予算編成の原則の実施」。他に「意思決定機関への女性の参加の割合」、「管区に女性デスクを置いているか」、「UNCSWに管区代表を派遣しているか」

男女差を測る指標、ジェンダーギャップ指数 (*Gender Gap 指数: 世界経済フォーラム2011年発表) では、日本は2011年は135カ国中98位。(2010年から4位下がりました。) 世界経済フォーラムは、保健、教育分野では男女差がなくなりつつあっても、政治・経済分野がかなり足を引っ張っている日本の現状を「女性が高度な教育を受けても、その1割も指導的地位に就けず、活躍できない」社会だと指摘しています。この日本社会のただ中で、教会がジェンダー平等を進めていくには、何が必要なのか、レポートを通して考えていきたいと思います。

(*) Gender Gap 指数: GGI 経済 (労働力、賃金格差、専門技術職などの男女比)、教育 (識字率、初等・中等・高等教育就学率などの男女比)、政治 (国会議員、閣僚数などの男女比)、保健 (平均寿命の男女比など) の各分野から割り出されたデータを毎年世界経済フォーラムが指数で順位を発表しており、日本の最高は2006年の80位。

■ ■ ジェンダープロジェクトより ■ ■

私は今日花をもらいました

著者未詳

私は今日花をもらいました/私の誕生日でも他の特別な日でもないのに/私たちは昨夜、初めて言い争いました/残酷な言葉をたくさん吐き出して、私の心をととても傷つけました/私が悪いと思っているのも残酷な言葉そのままを意味していないことも分かっています/なぜなら、今日私に花を贈りましたから。//

私は今日花をもらいました/結婚記念日でも他の特別な日でもないのに/昨夜、私を押しつけ私の首を締めました/まるで悪夢のようでした/本当であるとは信じられませんでした/全身が痛くて、あざだらけになって今朝目が覚めました/悪いと思っているでしょう/なぜなら今日私に花を贈りましたから。//

私は今日花をもらいました/しかし、今日は母の日でも他の特別な日でもありませんでした/昨夜、また私を殴りました/しかも、以前のいつよりも激しかったのです/私がある人を離れたら私はどうなるのでしょうか/どうして子どもの世話ができるのでしょうか/お金はどうすればいいのでしょうか/私はその人が怖いけれども離れるのも恐ろしいです/しかし、私に悪いと思っているに違いありません/なぜなら今日私に花を贈りましたから。//

私は今日花をもらいました/今日はとても特別な日でした/私の葬送式の日でしたから/昨夜、その人は私を殺してしまいました/私を殴って殺してしまいました/私をもっと勇気を持って力を出して、その人から離れたなら、私は今日花をもらっていないでしょう。

※出典：チョンヒジン著『私は今日花をもらいました—家庭暴力と女性人権』、もうひとつの文化、2001/2007（金善姫個人訳）

紹介した詩は、著者は知られていませんが、女性の相談ホームページの掲示板に書かれたのが本の中に紹介されていたものです。最初、この詩を読んだ時の驚きと衝撃を今も忘れられません。

教会に赴任して5年目を迎えます。赴任した教会で、神学院で勉強していた内容を説教壇で語ると、自分の置かれている状況の辛さを打ち明ける信徒が何人かいました。その中で、私は「女性」として働く時に、もっと多くを学び、もっと多くを語りたと思ったのです。その働きの一つがタリタ・クムの編集の作業で形になっていますが、ジェンダープロジェクトの役割が多様化していて、十分に対応できていないことに気づかされる日々を過ごしています。私たちの周りに、助けを必要とする一人の声を聴いて、共に生きることができるよう手と心を合わせてお祈りします。私たちの「女性」の働きが少しでも「女性」たちの声に応え、行動することができるように導かれますようにお祈りいたします。主の平和！

中部教区 フィデス 金善姫

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクト

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの人が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

**「性と人権 キリスト教全国連絡会議2012
のご案内**

日時：2012年10月7日（日）17：30～8
日（月・祝）15時半

場所：日本聖公会京都教区センター
（宿泊はザ・パレスサイドホテル）

参加費：4000円

問合せ・連絡先：

seitojinken@freeml.com

（〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2
-3-18-21 NCC 教育部気付）

日本の教会と社会の中で、性暴力や性差別
が起こっている現状を共有し、今後に向け
た連帯を考えます。

呼びかけ人：大嶋果織（NCC 教育部）、堀江有
里（信仰とセクシュアリティを考え
るキリスト者の会）、山口里子（日
本フェミニスト神学・宣教センタ
ー）、山下明子（キリスト教女性セ
ンター）

女性デスク、ジェンダー
プロジェクト、人権問題
担当者も賛同団体です。

第20回 聖公会女性フォーラム

日時：2012年7月15日（日）午後5時
～16日（月・休日）午後5時

場所：東京都杉並区

聖マーガレット教会

宿泊は参加者それぞれで確保

仮のテーマ：日本聖公会の女性たちの
20年の歩みを振り返りか
えって、

女性の司祭按手・ジェンダープロ
ジェクト・女性の課題に取り組む
担当者（女性デスク）・女性会議・国
連女性の地位委員会・、ハラスメ
ント禁止宣言・・・そしてこれか
ら私たちは？

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行
き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です（マルコ5：41）。今
までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や
感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられま
すようにという祈りと願いをこめて名付けました。